

#001	愛知 愛知万博の「その後」めぐり	p.01
#002	[よくわかる! PC基礎講座] プレキャスト工法の活用(その6)	p.10
#003	[特集] PCのニューフェースたち	p.11
#004	PCニュース ~北から南から~	p.43

## 謹んで豪雨災害の お見舞いを申し上げます

「令和7年8月6日からの低気圧と前線による  
大雨に係る災害」でお亡くなりになられた方  
ご冥福をお祈り申し上げますとともに、  
被災された皆さまへ心よりお見舞い申し上げます。

表紙のイラスト／豊田アローズブリッジ  
『愛知』愛知万博の「その後めぐり」で訪ね  
た豊田アローズブリッジをイラストに描い  
たものです。



### 広報誌の名称について



は  
コンクリート(C)にプレストレス(P)の力が  
作用した様子を表現したもので、  
「プレス」は定期刊行物を意味しております。

令和7(2025)年4月13日、  
日本国際博覧会、大阪・関西万博が  
始まった。184日間の会期中、大  
屋根リングに囲まれた会場へ向かう  
ために道路や新駅が整備され、毎日  
10万人以上の人々を会場へと運ん  
でいるようで、じわじわと熱気が高  
まっているようだ。そういえば万博  
に限らず、大イベントの際にはいつ  
も「レガシーの活用」をどうするの  
か議論があるけれど、実際はどう  
なっているのだろうか?と気になっ  
た。どこに行けばヒントが見つかる

#### ▼ 愛・地球博記念公園

愛知万博のメイン会場であった長久手会場の跡地に整備された。高さ  
88mの大観覧車といった遊具のほか、スポーツや自然体験ができる施  
設が整備されているほか、ジブリパークがオープン。



かしらと頭をひねっていたら、近く開かれるジブリの展覧会のポスターが目に見え、目を飛び込んできた。そういえば、昨年第二期のオープンを迎えたジブリパークは、平成17（2005）年に開催された愛知万博の跡地に整備された「愛・地球博記念公園（モリコロパーク）」に造られている。万博開催に向けて開通した道路や橋も数多い。20年が経つ今見て回ったなら、当時整備されたものたちのその後の活躍を目にすることができるとも思う。今度の旅は愛知に決まり！

まずは会場跡地の現在を知るためにモリコロパークへ。ジブリパークのチケットは残念ながら取れそうにないけれど、万博パビリオンとして建設された「サツキとメイの家」を展望台から見られるみたい。それから万博へのアクセスを担い、開催に間に合わせるように建設が進められた東部丘陵線、伊勢湾岸自動車道や東海環状自動車道、中部国際空港も巡ってみよう。せつかくなら名古屋でジブリ飯ならぬなごやめしも堪能したいし、ジブリ世代の私が心ときめくレトロでかわいいスポットをのんびり回って、ノスタルジーに浸るのも楽しそう。思い立った次の週末、新幹線で向かった名古屋駅でレンタカーを借りると、一路モリコロパークへと車を走らせた。

# 愛知

——愛知万博の「その後」めぐり——





▲ 東部丘陵線(リニモ)  
平成17(2005)年3月6日に一般営業が開始された、藤が丘駅～八草駅間を結ぶ、日本で初めての常電導磁気浮上式リニアモーターカー。上部工には多くのPC橋が採用されている。

## 愛知の空中をすいすい走る 期待をのせて運んだリニモ

モリコロパークの北駐車場に停めた車から降りて見上げると、リニモの愛称で親しまれる東部丘陵線の高架橋を、車両が静かに走り抜けていった。PC橋も都市景観になじむようにすつきりとデザインされていた。車体に取り付けられた電磁石の力で軌道から常に8mm浮いて走るリニアモーターカーは、万博開催に合わせて開通あまりなじみのなかった技術を会場に入る前から体感でき、訪れる人たちはワクワクしたんじゃないかしら。

## あるこう、あるこう 愛・地球博記念公園

駅の正面には、ジブリパークの目印「エレベーター塔」がそびえている。既存施設の外観を作り替え、心躍る空想世界への入り口に生まれ変わった。塔からは「魔女の谷」の入口や「地球屋」も見える。手前にある体育館のような建物は愛知万博の目玉のひとつ、マンモスの冷凍標本を展示していたグローバル・ハウスだ。閉幕後はアイスショーなども開催されるスケートリンクと温水プールとして活用されてきた。このうち閉館が決

▼ ジブリパーク エレベーター塔  
スタジオジブリ作品の世界を表現した公園施設のメインゲートにあたる塔。パークは令和4(2022)年11月1日に第一期開園。「愛・地球博記念公園」の中に現在5つの完全予約制エリアが点在し、園内をさんぽしながら巡ることができる。



▲ 現存するグローバル・ループ  
万博当時、全長約2.6kmの回廊で会場内に点在する展示エリア「グローバル・コモン」を結んでいた。歩行者だけでなく、電気自動車「グローバル・トラム」も走行していた。

まったプールを「ジブリの大倉庫」に再利用しており、今日も楽しそうに人々が建物に吸い込まれていく。

エレベーター塔の西側にある「愛・地球博記念館」に向かうと、20周年を機に万博を知らない子どもたちに向けて当時の取り組みや様子を伝える特別展示が行われていた。万博の全体像を予習したら、公園さんぽに出発だ。

「自然の叡智」をテーマに開催された愛知万博は、起伏にとんだ元の地形を残す会場づくりがなされた。そこで点在するパビリオンエリアを繋いでいた水平回廊が「グローバル・ループ」だ。今も一部が残るループの上に立つてみると、周辺の田畑の水

源にもなっているかきつばた池と周囲の丘陵を見渡せる。開催当時はこの里山風景と賑やかな海外パビリオンが共存し、自然との共生を目指す意思が分かりやすく表現された会場だっただろうと思った。

ループからは木々が生い茂りトンネルを作っている小道を進んでいく。つい口ずさんでしまうのはやっぱりあの歌。大規模開発を避けたことで公園内の森林には今も豊かな生態系が残り、トロやコダマだって住んでいるかも？と思わせてくれる雰囲気は漂う。たどり着いた展望台の向こうには、懐かしさを感じる赤い三角屋根が森の中に佇



▲ サツキとメイの家  
『となりのトトロ』に登場する草壁家がモデル。昭和10年代の建築様式を踏まえ本当に人が住める家として職人たちが1年半かけ建築。会期後も愛知県により運営・公開され、現在はジブリパークの一施設として人気を集める。

んでいた。「サツキとメイの家」は、万博において昭和30年代のエネルギー消費の少ない暮らしを体験できるパビリオンとして作られた。今は「どんどこ森」エリアの施設として、パーク入場者が家の中を探検したり写真を撮ったりしている様子が伺える。裏山に造られた「どんどこ堂」へと続く階段を子どもたちが元気に駆け上がっていく様子は、さながらジブリ映画のワンシーンだ。

愛知万博の跡地は、20年の時を経て当時の施設を上手に使いまわしながら新たな命が吹き込まれていた。ジブリパーク以外のエリアも、森の中でシャボン玉を追いかける子どもたちがいたり、のんびり散策を楽しむ人がいたり、穏やかに心地よく人々が過ごせる場所として生きた使われ方をしていると感じた。レガシーを活かす、その一つの答えを見せてもらった気がする。

## PC部材を組み上げた ピラミッド型ゲート

公園を出て南へ10分ほど車を走らせると、ピラミッド型の個性的な建築物、名古屋商科大学の「万博記念ゲート」が姿を現した。規格を統一した数種類のプレキャスト部材を積み重ねた上部のPC構造からは、太陽の光が内部に差し込んでいる。下部だけつるんとした形状なのは、学生



▲名古屋商科大学日進キャンパス 万博記念ゲート  
平成17(2005)年に完成した、キャンパスの通行用ゲート。階段状に配置したプレキャスト部材や通路上部の梁や地中梁にもプレストレストコンクリートを採用。

たちがピラミッドの頂上まで登るのを防ぐためだとか。確かに、全部階段状だったらきつと私も…。設計にはさまざまな角度の想像力が必要みたいだ。

## 愛知のソウルフード?! 「味仙」の台湾ラーメン

国道248号をさらに南下し、豊田市内に向かう。お昼どきに立ち寄ったのは、県内に多くの店舗を持つ「味仙」。名古屋生まれのラーメン「台湾ラーメン」を啜り上げる。コクのあるスープに、唐辛子と炒めたたっぷりのひき肉とニラをのせた、パンチの効いた一杯だ。八丁味噌を



▲台湾ラーメン  
鶏ガラスープにひき肉とニラを載せた、名古屋のご当地ラーメン。「味仙」の主人が台湾料理「担仔(たんつー)麵」を激辛にアレンジして店に出したのが発祥と言われている。

## 気圧されそうな迫力の 豊田アローズブリッジ

たっぷり使った味噌煮込みうどんなど、濃厚な味を好む愛知県民のソウルフードの一つを堪能した。

愛知万博の自動車アクセスを担うため、急ピッチで建設された道路の一つが伊勢湾岸自動車道だ。そのうち豊田市内の矢作川を横断するように架かるのが、豊田アローズブリッジ。水をモチーフにした「アクアリズム」をテーマにデザインされた、当時世界初の波形鋼板ウェブを用いたPC・鋼複合斜張橋だ。2つのPC箱桁橋を鋼床版箱桁でつなぐなど当時珍しい技術がふんだんに使われているというので、川沿いを歩きながら角度を変えてじっくり観察していく。水滴をかたどった主塔を意匠が施された地上部分から見上げると、巨大構造物の迫りに圧倒されたのだ。



▼豊田アローズブリッジ  
東海環状自動車道に繋がる伊勢湾岸自動車道に架かる橋長820mの4径間連続PC・鋼複合斜張橋。高さ125.8mの主塔は幅員43.8mの上下線一体構造の主桁を一面吊りする。

### ▼ 中部国際空港連絡鉄道橋

名鉄常滑駅—中部国際空港駅間を結ぶ名鉄空港線のうち、海上を渡る全長1076m、3径間+4径間+4径間の外ケーブル併用PC連続ラーメン箱桁橋。プレキャストセグメント工法による最大支間長100mは当時国内最大規模。



#### ◀ 擬似橋脚

海上橋と同様の設計思想で護岸に造られたモニタリング用建造物。保守管理や研究用データの採取に使用。



### ▲ INAXライブミュージアム

日本六古窯の一つ、常滑焼の産地に建つ体験・体感型ミュージアム。趣向の異なる7つの館では土とやきものの魅力に触れ、「光るどろだんごづくり」などさまざまな体験ができる。

## やきものの町のミュージアム カラフルなタイル万博へ

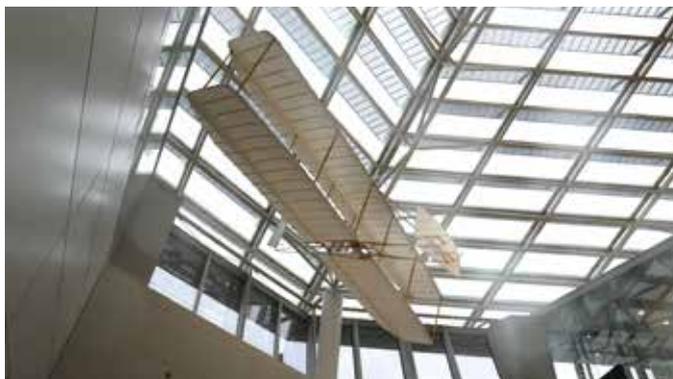
豊田市からは万博開催に合わせて完成した伊勢湾岸自動車道、知多横断道路を経由し、中部国際空港セントレアを目指す。その前に常滑ICから7分ほど車を走らせ、「INAXライブミュージアム」に立ち寄った。今日はここで世界を旅する万博気分を味わいたい。この中の「世界のタイル博物館」では世界各地のタイル装飾の再現や、各国のタイルコレクションを眺めることができる。地域が異なれば色使いが大きく違ったり、かと思えば意外な

国同士で似た図案が使われていたり、一つの場所に集めるだけで、世界の繋がりが今までとは違う見え方をする瞬間がある。これが「万国博覧会」の一つの意義なのだろうと腑に落ちた。

### 世界と万博の距離を ぐっと近づけたセントレア

万博開催決定後、愛知県内のインフラ整備は超特急で進められた。空の玄関口となるセントレアも、わずか7年で整備されたとか。常滑と空港島を繋ぐ鉄道橋も短期間での建設が求められ、名古屋港の弥富埠頭のヤードで製作したセグメントを運搬し架設する、プレキャストセグメント工法が採用された。1km以上ある長い橋を近くで見ようと常滑市側の橋の下に向かったら、疑似橋脚を発見！用途説明の看板には「100年間の耐久性を確保できるようにコンクリートの品質・性能を観察するためのもの」と記されている。いくつも残る穿孔痕は海洋環境下でも橋が健全か、繰り返しモニタリングしている証。日々橋の安全を守り、遠い未来に残そうと働く方々の仕事ぶりが伝わってきて、そっと頭を下げた。

橋を渡りセントレアに入る。万博開催中はさまざまな国の人がここから会場へ行き、また自国へ帰っていったの



### ▲ 中部国際空港(セントレア)/ライト兄弟のグライダーレプリカ

平成17(2005)年2月17日開港。滑走路まで約300mのスカイデッキや飛行機とデジタルアートが楽しめるフライトパーク、展望風呂などエンターテインメント性にも力を入れる。グライダーは航空機と関係が深いとして、万博終了後に空港に寄贈。

だろう。今はジブリパーク帰りらしき人たちが、朗らかに搭乗を待っている。スカイデッキ手前の吹き抜けには、愛知万博アメリカ館に展示されていたライト兄弟のグライダーレプリカが浮かんでいて、『紅の豚』や『風立ちぬ』のワンシーンを思い出した。ちなみに世界に4機しかない、飛行機部品を運ぶための貨物機「ドリームリフター」の発着を見られるのも日本ではセントレアだけ。飛行機好きを隠さない宮崎駿監督は、ここに来たら子どもみたいに喜ぶかも。万博と共に誕生した空港は、名古屋と世界、そして万博でできた縁を今日も繋いでいた。

## ターミナル駅から5分の 旨さと活気あふれる市場へ

翌朝は早起きして「面白いところがあるよ」と地元の方に教えてもらった柳橋中央市場へ足を運んでみた。名古屋駅前の硬質なオフィスビル群の中に、魚や野菜を描いた素朴で温かみのあるアーチ看板がひよいと建つギャップがいい。「東海の台所」と呼ばれるこの市場は、卸売はもちろんのこと一般客でも食材を調達することができるとあって、朝から熱気にあふれている。新鮮なお刺身



▲ 柳橋中央市場  
昭和44(1969)年、名古屋の一等地に開場した民間卸売市場。スローガンは「活魚と共に百年」。プロが目利きした鮮魚をはじめ野菜や肉、乾物の専門店が並ぶ。

のほか、行列ができる中華そばなど市場グルメも地元で有名なのだとか。あちらで一皿、こちらで一杯とつまみたくなってしまうけれど、絶対に食べたい朝食があるのだ。ここへこのお腹を抱えて、近くの喫茶店へ向かう。

## 名古屋の朝といえばこれ！ 喫茶店のモーニング

「コーヒーハウスかこ」は、名古屋で初めて自家焙煎珈琲を始めたレトロ喫茶だ。モーニングの時間帯には名古屋の喫茶店らしく、トーストがコーヒーに添えられる。『天空の城ラピュタ』の目玉焼きをのせたトース



▲ コーヒーハウス かこ  
昭和47(1972)年創業の喫茶店。こじんまりとした花車本店と、すぐ近くに鉛色の落ち着いた柳橋店を構える。写真はシャンティールージュスペシャル(モーニングの場合ドリンク代に追加料金、その他の時間帯は単品注文可)。

トをはじめ、ジブリ作品にもそれは美味しそうなトーストが登場するけれど、ここで旬の果物をじっくり煮詰めた宝石のような自家製フルーツコンフィチュールをのせた小倉トーストをぜひ食べたかったのだ。果実のみずみずしさが残る4種類のコンフィチュールと生クリーム、そしてあんことの相性を一口ごとに味わう至福の時間が流れていった。

## 庄内川の上空に 羽ばたく赤とんぼ橋

— 高速道路の高架に沿って市街地を北上し、街をぐるりと囲むように流れる庄内川に向かう。川沿いに出て視界が開けると同時に、赤いケーブルが鮮やかなエクストラードーズド橋が目飛び込んできた。主塔から横に広く張られたケーブルがとんぼの羽根を連想すると「赤とんぼ橋」の愛称で親しまれている。ケーブルの印象が強けれど、近づいて見ると全体にスマートな印象だ。かつて氾濫を繰り返した暴れ川と呼ばれていた庄内川の流れを阻まないように、橋脚は高強度材料でスリムに造られている。少し珍しい逆台形の主桁は機能的ですっきりとしたデザインでまわりの景色になじみ、周辺地域のランドマークになれているようだった。

## ▼ 赤とんぼ橋

名古屋高速6号清須線の庄内川に架かる、橋長294mのPC3径間連続エクストラードーズド箱桁橋。主塔部分は鋼とコンクリートの合成構造で、現場作業の省力化を図った。





▲名古屋市政資料館  
大正11(1922)年築の旧名古屋控訴院・地方裁判所・区裁判所。中央階段室や外観にネオバロック様式の特徴が表れた重要文化財。現在は名古屋市の公文書館として利用。

## ネオ・バロックの資料館でもう一度出会った万博

ジブリパークの監督、宮崎吾郎氏は「ジブリっぽいってなんだろう、という僕の解釈は、宮崎駿の世代の人たちが憧れた、大正から昭和初期のモダンの時代だと思う」と、雑誌で話していた。確かに友人たちと「ジブ

リっぽい！」と盛り上がるのは、懐かしくて非日常なレトロ建築を訪れたときかも。それならここからは、名古屋市内の明治・昭和期の建築をのんびりと巡りに行ってみよう。

赤とんぼ橋から町の中心部へ戻り、名古屋城の南東方面に位置する名古屋市政資料館へ。連続テレビ小説『虎に翼』や紅白歌合戦のロケ地として登場し、今大注目のスポットだ。正面から入ると、荘厳な階段がまっすぐに伸びている。ステンドグラスからは光が差し込み、公正な裁判を表す天秤のモチーフが凛と浮かび上がっていた。元は裁判所でもあった館内には昔の法廷風景などが再現されていて、かつてこの場で繰り広げられていた光景を垣間見ることができ。館内を一周したところで、なんと「大地の塔 記念展示」と書かれた小部屋を発見！「大地の塔」は、愛知万博の名古屋市パビリオンだ。「世界最大の万華鏡」の映像や、市民の切り絵作品をはじめ込んだ「切り絵灯籠」の一部が保存・展示されている。まさかここでも万博を追体験できるなんて。「さよならまたいつか！」と、閉幕した後もあちこちで顔を出して記憶を新たにしていくことが、百年先も開催時の想いを憶えてもらおうためには大切なかもしれない。

## パリ万博の舞台に立った女優第一号が暮らした家

市政資料館から東へ進むと、オレンジの屋根に円柱の部屋がかわいい大正時代の住宅「文化のみち二葉館」がある。外観はもとより各部屋のステンドグラスにらせん階段、窓の下のヌックなど、ジブリ作品でいつか見たような気がする光景ばかりで、なんだか映画の中に入り込んだよう。ここは1900年のパリ万博で披露されたお芝居に出演し「マダム貞奴」として一躍有名になった、川上貞奴が暮らした家を移築復元したものの。



▲文化のみち二葉館  
大正9(1920)年築。「日本の女優第一号」と言われる川上貞奴と、事業パートナーの福沢桃介が居住した住宅。当時東二葉町にあったことから「二葉御殿」と呼ばれ、政財界や海外からの客人を多くもてなした。愛知万博の同年、平成17(2005)年に開館。



▲ひつまぶし  
鰻の蒲焼を刻み、ご飯に混ぜて食べる名古屋の郷土料理。市内には数多くのひつまぶしの名店が軒を連ねる。

当時のポスターを見ながら、100年以上前に日本人が見た万博は、一体どんな景色だったのだろうと思いを馳せた。

## 旅のご褒美ランチは香ばしい焼きつなぎ

みそかつや手羽先など味わいたいなごやめしは挙げればきりがないけれど、旅人の私はやっぱりひつまぶしを食べねば帰れない。甘辛いたれに何度もぐぐらせながら焼いた鰻を、まずはほかほかごはんだけで一口。香ばしさが口内にふわりと広がった。次はねぎと大葉、わさびをのせてさっぱりと。最後は味わい深い出汁をかけてお茶漬けに。ぐいぐい進む箸を置くと、ふうつと満足気な吐息が自分の口からこぼれたのだった。



▲ IGアリーナ

令和7(2025)年7月にグランドオープンした多目的アリーナ。隈研吾建築都市設計事務所が担った外観は、名古屋城と隣り合う名城公園の緑と調和する樹形アーチが印象的。

名勝負を生み出す  
IGアリーナが完成

万博から20年、今年名古屋には世界との架け橋になる新たな施設がオープンする。国際スポーツ大会などの開催も可能な「IGアリーナ」だ。そして熱戦やきらびやかなステージへ歓声を送るアリーナの座席をPC梁が支えている。訪れたのはグラウンドオープンとなる大相撲名古屋場所の直前で、完成したアリーナの周囲で公園や地下鉄を整備していた。いつかここで、世界的に記憶に残る試合が生まれるところを足元のPCと共に見てみたい。

世界のトヨタを生んだ  
情熱に触れる記念館

『ハウルの動く城』をはじめ、ジブリ作品には少し古めかしくもロマンあふれる機械が数多く登場する。そこで最後に訪れたのは、日本の技術力をけん引してきたトヨタグループが運営する「トヨタ産業技術記念館」だ。日本が繊維産業を貿易の主力としていた時代、自動織機の発明に心血を注いだ創始者の豊田佐吉。国民一人ひとりが自動車に乗る時代を実現するために、命を削るように奔走した豊田喜一郎。二人のことはもち

ろん知っていたけれど、実際の機械や開発過程を目にすると、想像以上の熱量が伝わってくる。『魔女の宅急便』でキキのお父さんが乗っていたものと同様似たトヨタの初代小型車や、キキとウルスラがヒッチハイクで載せてもらったようなクラシカルなトラックと記念撮影もできて大満足。ちなみに、愛知万博に展示されていたロボットも展示されていて、最高の旅の締めくくりだった。



▲トヨタ産業技術記念館  
1911(明治44)年、豊田佐吉が自動織機の研究開発工場を設立したトヨタグループ発祥の地に建つ記念館。研究と創造の精神とモノづくりの大切さを機械の動態展示を通して伝える。  
(写真:トヨタ産業技術記念館提供)

出発した時は、過去の万博とジブリの影を追いかけて、のんびり癒されて帰ってくる旅になるだろうと思っていた。けれど最後に訪れた記念館で、私の快適な旅や生活の基盤を築いてきた人々の、ほとぼるするようなモノづくりにへの情熱が流れ込んできた。考えて

みれば、私が幼いころから当たり前のように楽しく観てきたジブリ映画も、宮崎駿監督を始め多くのアニメーターたちの情熱が結集したものだ。今回想ってきた万博も同じ。半年間の展示のうちの未来を見据えて、それぞれの国の叡智を昇華させて、はるばる海を越えて運んでくるのだ。並々ならぬ情熱を持つ人の働きなくしては成り立たない。私は、多くの人の熱意のバトンを知らず知らずのうちに受け取って、今ここに立っているんだ。彼らに恥じないくらい、誰かの記憶に残るモノづくりを私だとしていきたい。帰ったらもつと頑張りたい。おなかの底からふつふつと湧いてくるものを大事に抱え、清々しい気持ちで帰りの新幹線に乗り込んだ。

赤とんぼ橋 (p.06)



東部丘陵線(リニモ) (p.03)



トヨタ産業技術記念館 (p.08)  
名古屋  
柳橋中央市場 (p.06)  
名古屋市政資料館 p.07  
文化のみち 三葉館 (p.07)

ジブリパーク (p.03)  
愛・地球博記念公園 (p.03)

名古屋商科大学  
日進キャンパス (p.04)

IGアリーナ (p.08)



名古屋商科大学日進キャンパス  
万博記念ゲート (p.04)



名古屋港

中部国際空港連絡鉄道橋 (p.05)



INAX ミュージアム (p.05)

豊田アローズブリッジ (p.04)



# 愛知

愛知万博の  
「その後」めぐり

## 旅MAP